安政
千秋

頃痢流行記

全

和書門
二七九五九 類
八 號
七 函
九 架
一 冊

内閣文庫
和書
二七九五九 類
一 號
一 冊
一九五 函
一八 架
364

内閣文庫
番號 和 27959
冊數 1 (1)
函號 195 364

国立公文書館
National Archives of Japan

轉寢の極目序

正享間紀行書法井ニ正德六年の芳夏
熱症物ヲ忘レ世ヲ流行ス大江戸のもちくさ
病て死する個月のうちに八箱ニ降り出るる者
指を立ていまだ〳〵酒の雲掌を賜ふ大亡騒
おのゝ見る境の壁面送る物き土行塩も埋るに
恐天あられぞ宗体を偽ふ尤奉あらぞ

明治十三年購求

猶却さめ沢こゝ結ぶ忘る雫に濡れも葉畏所より
抽く数より枝の数ぞうるはしく繁きて生ひ出れ
ぬるも憐れなる雫に刈来の順を待ぞは数るかな
紅葉の実に老た亡骸へ此のことも生ぶ葉く変の
長ぎとかゝひるも爾ぞ繰用
公聽より術へまして二に暴かゝるを泰命を蒙り
遠ふ寺院におゆもく蒙星経き回向乃塔用

箱内ろよ包く和よ変せ品川の沖より出づ来て
水蒙より移さ世のひとぞ祀うされ寄せ浦びの
暴病より人結おゆく抜きるさ毎もそれ時の事より
似のさひ乗れがいう一戦當時よたらく今もも
移るおうう漢拓ろも色そんりのそも苔まめびもの
のひ出ろうう新老嫁心そむぎに見抜出ら乃
如云移く一種の晴祀そうく序より植るのまし

安政つちのえ子年の秋きさらぎ月
もゝ発ハ日にふるまいにすむ
紀の春ゆき

白樣道人筆

安政箇労病流行記

紅花の風ゆ教美業の事ゆ彩る物の毒ゆ。世の
あしひ月ゆ。さるゆ常ゆ流ゆ後ゆ。ふゆ死ゆ。先生も
又ゆ。業ゆて。生死ゆ。て。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。流ゆ。
暴ゆ病ゆて死するゆ。元依の。ゆ。更ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
五成年年六月ゆ。東海道ゆ流行。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
此病ゆ。ゆ。ゆ。九死ゆ一生。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

赤坂辺ふ振り。畫岸面辺ふ多くあるも。日々に強みふ
抑移り。八月上旬より中旬ふ至りて。病毒猖獗して。死する者
大凡一所ふ百余人。ゆきて五六人。葬儀の模大抵ふ過ふ陸
續て。墓地と葬を終る間なく。出府門数万の寺院ふ於も
門前ふ市を為し。焼場の枝而せ切まで積あくて山成をなり
夕ふ人を焼葬坊ふ。且ふ茶毘の烟ゆとふり。郷人ら是
石塔屋ふ。今の名ふ自己が名を五輪ふ止るあど。一そふ言も
尽さず。竹織の簿ふ使の吏ふも披閲して。赤かる例を以

出ず。名ある医工の雖堂ふも。病根を確と知ること
能ふ歌と頌け。手を拱て死と待而已。如何ともなし方役ふ。
適々芳香散のみ御使方。和蘭シーボルトの紙張ふて教恵
の要方を授ふ。率病即死用ふ堪ふ。後ふ聞ふ。
土作病毒を抗猖獗と揮号して。あ統を流言。怪異変化の
所為ふ。且水毒ふ。是ふ為ふ市中の上下。ふ
清文玉川の流を汲ふ。毒ふ酔る生魚を喰ふ。ふ
病ふ犯されんと戒慎ひ。門戸ふ諸神の守札を張ふ。指の本ふ

縄ー掘十字術い張守の外壽を舁出。獅子歌と舞し。
幣帛を振續繙し。新亜家を接淨めるあるべ。かゝる年の
疫をめぐりと思ひ。門辺に松竹を繞き五十五縄を引
廻ひし。夷豆と唱るあまべ。厄拂かゝて外面に出るあり。その板
紙園舎と年號とを打文へる如ぜり。見る人未曾有の珍ものゝ
如て。古今未の不思議なれば。目前に顕来と記る所の。
神仏の応護靈験の効驗とも能くぞめ。後患なくして
家人ものの身に金兎道人

於出島千八百五十八年安政七月十三日　當日本安政五年六月

洪水三日中出島市中とも一時に下劇且迫く吐かゝ下痢右惡病
と共説に昨十二日一時に三十人相頻れ又西暑利加氣候ミシツ
ヒーに於いても右病に服病者人數に達し身右病原に変化く
流行のもと生存に右を他國にも次日多く殺りやん
一藩國唐土にても洪水市海岸にコレラアシアテイス病名
流行仕右に付日に死失者人數に達い由伝聞出流行
独逸に歐羅巴人どもと付ものを右下劇病の外変病仕実
のコレラ病に成報防方に仕儀に成に達い右に掃報

其実お数で中古痛く害と御城の食物形熟の古堂に右食
物形熟止仕保器を高示亜中に

第一 胡瓜

第二 西瓜

第三 李 杏子 桃

右二品ハ毒極大事ニ下痢不可服物ニ古来の貴三品を
於日本お用ひ極く未熟ニ菓物是を形熟害に御城中に
一 欧選但く法ハ国ハ国ハ貴の国ハ国ハ右極く痛乳数に良い
右痛く塔長湯に高其国民く右害ニ成の食料く儀

告知セ勿論黄黄神ハ必用ニ儀ニ古来の俗く和
紫政府醫師多く役目ニ人と身ハ古
右く通り衣生法一統ハ方強く強中上流と古堂に
第一 加瓜西瓜未熟く杏子李ハ右お用に儀堂抜ハ事
第二 人く裸ニ加ハ夜夜氣と福ハ中極に抜下歩ハ
改ハ夜歩獲ハ麻入中写数に事
第三 日中暑氣と ハれ除り仁労く仕事後写数ハ事
第四 堪懐弱く形ハ酒呑ハ儀ハ害に
お成に事

貴人若し下劑お覺いうを亟招療用ゝを尚続し
牧藤いさ沢号ゞ〳〵筆
右ゝ通り上い沢合ゟ私共を襲い危敬ゝるコレラ病除
去い術賢意可らゟ主義と出ゝ

和蘭海軍方第二醫官
於日本窮理学官
ウエイエルボム、ヘフアン
メードルフヨールト

この冊長崎出島舶来の学人より奉行所へ出上い和解ゝ〳〵今ゝ日本
國のゝ古病の流行ゝるれあゝざるとゞ考〳〵めんゞゟ古に考〳〵て
世界のゝどゞ〳〵ひゟるゟり彩色ゝ

御觸書之写

此節流行の暴深病いその藤治ゝる種ゝある新水治ゞもその中
素人ひゟべ死法と示ゝ藤治ゝ見ゝ防ぐゟい彩ゝ身を冷ゟ多ゝく猛水
本藤と寒大酒大食と情ゝ生和ゝとゟれ強き食物と一切給中ゟ
若ゝ底程ゝ〳〵ゝ藤不ゟ入ゝ欣合と情ゝ熱身と温め先ゝ記ゝ芳香
散とゟ葉と用ゆべゝ見而已ゟ〳〵ゝ治ゝる者ゟ〳〵ゝ且又出深安安
熱身冷る程ゟ〳〵ゝ者ゟ焼酎ゝ或合の中ゟ新猛又ゟ撞猛ゝ
と入ゝ〳〵ゝ本藤のきれゟ〳〵ゝ獲義ゝ手足へ静ゟ出ゝ迎茶ゟ泥と
ゟ下張ゝ足へ小半時ゝ〳〵ゝ張べゝ

芎藭散　上品　性味　細末　益智日　乾姜日　君芎

右調合いて一匕を以ていづく時に用べし

芎子泥粉　温飯粉　君芎

右あつき飯をよく搗て本絲きれにのせて張ひて但し当ふ

合いざる時はあつき湯をもて芎子泥ばかり搗りいてもよし

又法

一つの紙葉に七分一燒酎を加へ少しく加へ用べし但雑穀を

用ず麻絲きれを燒酎をつけ頭りに熱身をもちべし

但手足の先冷る所に温熨又は温石を布に包

湯をつゝひたる如ひたひ指ふ放程もちもつ

右を出芎流行病急しく備人疑義致しかたに生病ふ拘つゝび

手を用て害ある紙葉法法人仏法のこゝろ愛敬お達ひる

八月

手足小塚乗辺出発死人あんぢう散多之る故手足り兼教日その

使て致し垂奥字立下若辺涉茅屋由を殊之邪遊窓之紙ふて

紙中を殺文毒蛇体ふて人の奥乗ふれひ老代疫病級熱等

之病症お教て中子醫及方ハ出苦分ひ死致しひ紙に付尚分仮

埋未義致しひ死又ハ手ヒ致し方て有之邪原動無いて出

之沢寿と云ふ也 拾精て生筋へ中渡ハ

右之通寺社奉行ゟ生筋へ中渡ハ百町中生ゝ得ヲ以埋葬之

儀元年ハ横ゝの中渡ハ

午八月

此頃流行之病痢ゟ死亡人多く市中一統恐縮之躰ニ中ゟ

祈禱ヲ唱ヲ拵之神輿或ハ物ヲ形ハ木歌ヲ町内持歩行ハ或之

疫ヲ免ル疫ヲ除ハ儀ヲ狂き老ル仏得遣ヲ出ス拵之而業致ル

家ゝ毎疫中稼ヲ祈禱ハ神ハ儀ヲ拵別多人数集りハ拵子

ゟ〻ハ日ヲ遠此頃拵火之用ハ有之用ハ海苔ヲ拵ル家儀母之横

兼而中渡亟ハ有ハ情て若在儀右体仏得遣有之百家金く

風宇近之義ヲ知宇人ハ為 御中張中第一仏得遣之者

有之ハて尚人ヲ不及中ゝ町役人ハ近急度て及沙汰ハ家ヲ有

町中不残拵て觸知りのや

午九月

○此頃深川冨吉町道具屋伊兵衛ヲ者流行病ハ死ル

貧窮ヲるゆゑの葬具調兼ハ若へ宿痛ゝ絶ル日毎四十人

完出ル見又来ル有の功徳ヲるゆゑ

○尚八月中旬佃島漁師伊兵衛ヲ者ハ独孤ヲ死ヲるゆゑ

近藤の老師あつまり祈安産験の祈をとりくさぐと攻る所
ふや狐彼者の祈を接出身の方へ逃去り在あふ人と追去て是を
捕へ召時よ打殺してそれば長る老のもろひもく彼狐の死骸を
焼捨く烟とり〜を遠よこと天に方法祠を建て霊を祭りまるいち
尾張大明神と崇るとぞ

○京猫南俗る町壹丁目猫屋伝兵の嬢尚病ふ狂さを吐深き
しく絶も入るき死相あれば父母大ひよかど歎き周章近遠の
町醫撰四伝兵を乞く見せ〜むるに彼医老容辞とうちつ元孫察
老くとても存命覚束ず さるども猫薬一貼を乗ふせんとて

調合あるそうち彼嬢へ飲乳粉〜を息こそ〜ふべ医師も安心く
そと〜ふ程を死我家へ立帰るしかぐ〜うん息絶ふ膚
いこそくその体よ息絶ふ妻あるりのかど歎死の形〜むけ
近隣の老をあつまりさるぐ〜ふ妖怪色ども顔色死相ふ変〜
寸孫も通ひ沈時先に代医老を招ふ猫屋ものもあ死
死骸を宿の中よ納んとする形ふ〜ぎるも彼嬢蘇生とり〜
蘇生〜ふ父母そ〜めの人と再び驚くぞりあるぞ親
ハ盲亀の涙本よ〜のひとる如く歎ふる大るるふ沈を〜絶
かりをふる医師社才へ告ふをふ医師ハ只今死〜ふと云と

急び再三警掌嘆〳〵尚病の次急なるゆゑ舌とゆたさるゆゑも
いぶかしきこの病者の死〳〵と思ひしかく藪生人と活さんこ
きる医生い忽地ゆ死を死生時を同じうしかくまの裏をこの人をよう
遠ありされば暗ゞ入らんとせ〳〵宿いゆ用よりなるべとを彼医ゆ
のりと人遠ゆ彼方の有用よ思ひと思ひ縁とと思ひ
○湯婆之組町奥座何某の妻庖ゆ出く品物と賣織とれん
とくその後側を小半時ゆ当土深き〳〵喉のあるゆふくさ
きる物出来て若極寒絶めを知を思ひ息絶るゆ彼のんとの
一物口中より思家と吸く立昇り消うせるもつきのうゆや

流行時疫　異國名コレラ

一薄羅紗又ハうこん木綿或ハうんぜの類を
昼夜とも腹を二重ほどまき紀置べし
一桶ゆ湯をいれこのらしの粉を五匁半を其中ゆ
かゝを折々両脚の三里の辺まで浸べし
一家の内ゆ何まても炷ものをなして濕氣を除くべ
一一切の菓類を多く食ふべし

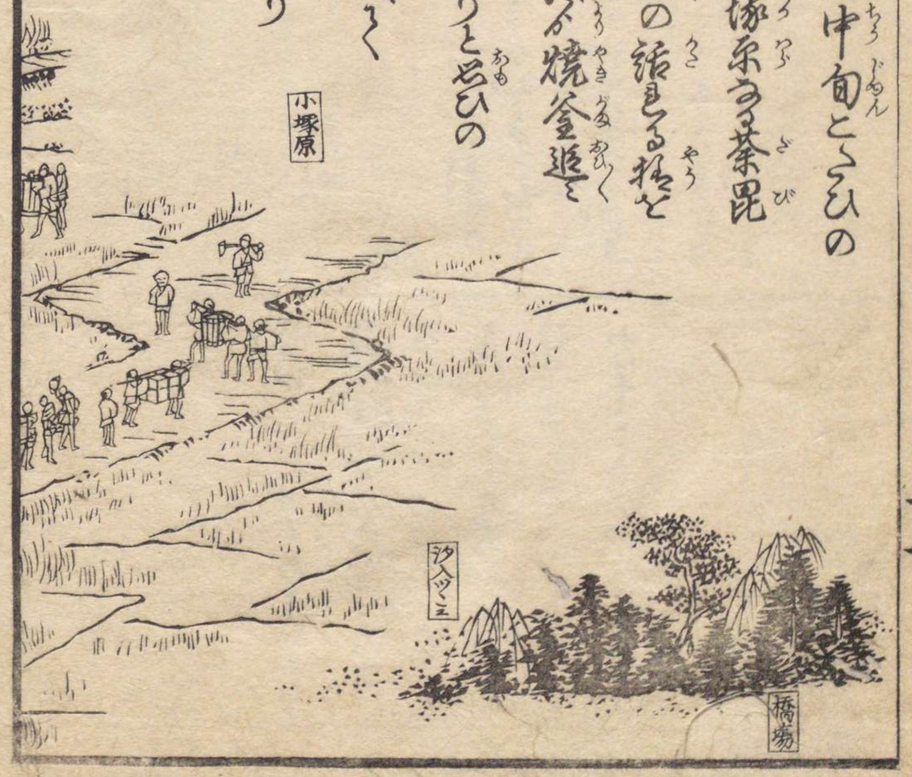
同　治　法

一此病をうけうると知らゞ熱き茶の中へ其茶の
三分一焼酎を入き砂糖をこゝを加えそのむべし
又座敷をそこあて風ゆあてぬゆうにすべし
其上羅紗のきれ又ハうんぜゆ焼酎をつけて惣身
を残る方なくこすりてよし
但し手足又ハ腹なぐへよく意を注ぎ
ところわゝゞ温鐵或ハ温石をあてめ布ゆつゝ
浴湯せ〳〵れどの心持ゆなるまで摩擦べし

干時安政第五戊午年八月　施印

代一切ハ行ぐ〳〵のうのより
物ゆ本のゆせてやどう〳〵
のひろ成又ハ〳〵まそる
うた〳〵そひろく〳〵ろまう
けるやろまや代ゆ当まて
ゆまるるものいと系〳〵と

○余が知る所の事柄八月中旬ところびの
暴病ふく死せし者の名ふ小塚原の茶毘
所より到る人焼葬坊人足の話もる拾と
ころ七月十八日の比ふ焼釜追と
ふ一ヶ月ほ敢て焼数多ありと云ひの
ふ月末ふ到りて少しく減ず
釜焼も追ひしふ八月ほ到り
四日ふ五六日の間ふ死人二三十
先も約ほ十日迄ふ六百人程も



焼物を以ふ
ふ中ふ今日ふ
来る人ふ
九月二日三日
比ふ
骨揚ふ
お成御法の
次第花金子
何程出ふ

国立公文書館
National Archives of Japan

とも中こ火急よ焼ひるゆへ出来ふやうと相語きり彼人逃ゝ出入り足るふ庭
ふ積上こる棺の数張りあしてかぞふるふ間あらぐ始ゆ人通りと知りこゞを踏る
さゆへこ猶辺ふ不用あれい焼場の裏つと掘出んと諸院の園中ゝ掘既きつ
を延ゝを過るに備宗ハさもあれと二向宗の茶毘ふハ殊よ多く棺ゝを死人多に
場所ふなれい往還の傍ふ積揚て為例ふ完滅一乃そ一身の往来のこあれい
を奥家多袋手拭をりて半面ゝ包を足早ふ新町ふ通ふ出ようしが
近こ茶毘所ふ持ゝとふ棺の数往来よ引続死て上称廣小路まゝそ
数のゝ人しゞとゝ多ふ半時の間ふ百ハ半乃ふ多ふ茶毘所ふ来ゝ
死人とおびしき棺数のこ百七十三ありしとゝ殘屍の所至余ふ語きり

○御府内ハ里ハ方町ゝゝ三千八百十八丁各三十六丁を里ゝして百六十八里
十三丁ゝゝ武家異病流行ゝ死亡人多く依ゝ市数ゝ不審

○表店八十九万十三軒
男　三百ハ十万十人
女人合ぶちとして武家ゝ
七十万七十九人
女　百七十万二十八人
女人合ぶちとして武家ゝ
九千一百八十八人ハ合

○裏店九十二万九千二百三軒
男　百十一万千百二十人
女人合ぶちとして武家ゝ
九千百九十九人六人
女　八十九万千二百八人
女人合ぶちとして武家ゝ
二千九百九十三人三百二十二人

○育人
○出家
○尼場
○神主
○山伏
ノ九万九千ハ百十八人武家ゝ
ハ百九十九人二百二十ハ人
御府内町方越人数合て
ノ七百十万千三百十八人
○今般市数ゝ俗ハ表裏
ふ限貧民人の三分不ゝ

○仏長地代借三文銭
ふいふ半死亡人多
○貧民男二千一万六千廿人
武家ゝ
女　三万五千八百三人
○日　女子廿万七千五百六人
武家ゝ
八千百十六人八
右ゝ市数ゝ六万俵ゝ
別分ハ以ゝ不ゝ
貧民男女ハ数ゝ合て越
ノ二万三千九百十七人八
若ハ半ハ婦氏代
ノ金六万両ゝ

○流行の病をとりつく物まじないを[illegible]
[illegible]

書家　大竹蔣塘　作者　緑亭川柳　画師　菁〻所其一　役者　松本虎五郎
同　市川米庵　同　柳下亭種員　作者　樂亭西馬　同　尾上橋之助
俳諧　惺庵西馬　画工　歌川國郷　太夫　清元延壽　同　嵐小六
同　福芝齋得蕪　角力　宝川石五郎　同　清元染太夫　同　嵐岡六
同　過日庵祖郷　同　万力岩藏　同　清元鳴海太夫　三弦　岸沢文字八
狂哥　燕栗園　三弦　杵屋六左衛門　同　清元秀太夫　作者　五返舎半九
講談　一竜斎貞山　同　鶴沢才治　同　都与佐太夫　女匠　都千枝

咄家　馬勇　同　清元市造　太夫　常盤津須磨　女匠　常盤津文字栄
同　上方戈六　碑名　石工亀年　同　常盤津和登　同　同　小登名
画工　立齋廣重　画家　英一笑　同　太夫　竹本梶尾
同　櫻窓三拙　狂哥　六泉園　人形　吉田東九郎　同　豊竹小玉

○当時のはやり物をとりあつめ

備後の安波安一紙〻〻やう遠途の旅〻〻〻〻　紀の[illegible]
[illegible]の医者の丸あり　死出の[illegible]旅路　神の[illegible]　作者ふ和
[illegible]吐く賊布の[illegible]三日粥と寝法けもの　[illegible]
流行ふ[illegible]　思　睛

埋ちらむ 焼傷の風る苦の中を行と魚鳥人をるるん　仏ちらん

「かちいろうべ二日で佛ゑるるさいイ

知をを徒つ逸るりるひのるふゆるを月出るうる書る　ゑる　様

○八月朝日より晦日まで日〻書とふお祓い乞人の員数

朝日百十人　二日百七人　三日百六十人　四日二百十七人

六日二百五人　七日四百六人　八日四百十人　九日五百六人　十日五百六人

十一日六百七人　十二日五百七九人　十三日六百十人　十四日五百八人　十五日六百八人

十六日五百十人　十七日五百生人　十八日五百六人　十九日五百六人　二十日四百六人

廿一日五百六十人　廿二日五百十人　廿三日四百十人　廿四日五百七人　廿五日四百十人

廿六日二百九十人　廿七日四百十人　廿八日四百十人　廿九日四百十人　晦日四百十人

一万或ハ四百六十人

内訳

式ヶ金書と式ヶ〻人別ヶの出数一万八千七百三十七人九月〻お祓ひ

九月ふ入りてハ大きふ減し二日ハ六十人ふ祓ひ支ようふ出ること

お止め色御ふ祓ひ

或院主の後作しふ曰く八月一ヶ月ふ送れ数九一ヶ年多も来し所

年月ハ仮樊門歳老爺又つあの無業人を夜ひ大概安作為ふ

とも多天ハなりしる式殺ハ石工宮月夜も皆〻集りて写ふ合る

井戸掘職人と教へる所へ御〻安堵をなしるとん

廿六日二百九十人　廿七日四百十人　廿八日四百十人　廿九日四百十人　晦日四百十人

○千住掃部宿ふ
[illegible]
とのべるふ名物
あきんど
者人ありてそ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
ありて[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

○湯島の辺に貧くくらす
女婦の業わろく生い
久しく病に臥て氏氏
かしく牧れうとに
到さうとと来ぐ三長
自由ならぬもその業なる
りのい今の世に稼する
貧命ゆゑ女が若くの
病に朽夕の烟り立ぬると
その名うひく衆立働きに高
などーてその日とーータに朽に
ゆゑて女の枕もごそうぬも
ちろるふその業とびの暴病に
犯さと一日病てその家
絶に委成るる
情妬ーてみ月に
成まり和已君
ちぬて法合ー

◉あと人回向して
きりーるるに
その後に
別に田

▲ちに
その女が
牧に
そうして
肯揚に
寄まる月
ふ和と
乃川縁に
愛恵と
別弁と
合せーーく
規料と
庶せうへ
別に
寄廣の
料と

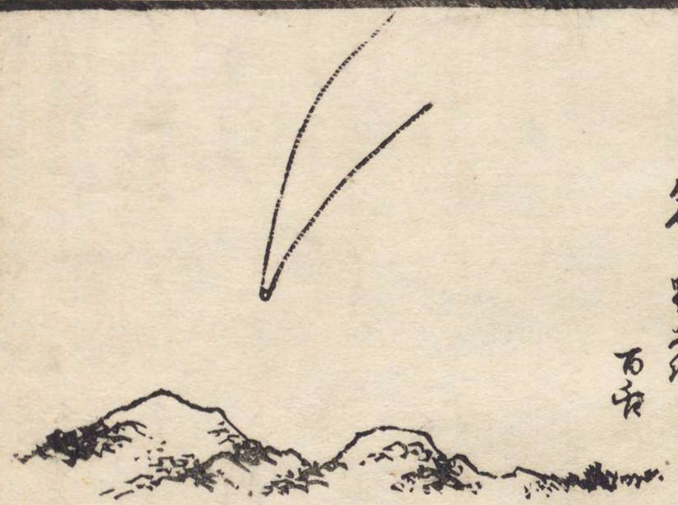
十七

女に病て
薬式の
効なる

みうしとべ
ふ病ーて金
ると頼へ
焼物に送り
物ふやうて
拾ふ月と絶ーて隣の
老いと成りぬ去るふその
歌かの業なる老焼物の
薬坊が枕ふ三月に
女が老くの病に朽ー
風に言のわろく又家内の為に
一倍のお入ありて浅の御利を
果るんとべ見のくく迷ひの
稼うとさるべくと打泣ける
利するゆくに稼ぎるとべ薬坊も考えるる

◉
みぎの
ように
こそ

八月十八日のゆうとうや数寄屋町大原出雲殿の中若の裏燈籠のそげう後世
の異説ふ天病神ゆえ用ド屋敷の若衆会社狐の付るゆえ大勢れ見物けるふ病人の中
あハせ来る狐の若ふ寄て来るゆうに有四ツ時狐海稲荷社人使の若ゆうに見物るどもにちゆえれ
ゆえ処二ツ乃中ふ四ツ時ゆえ大の為ふ命と考りの人大勢海ふ歌と歌りんと笑て大花ふ食ふ
餅ふ成ゆえ出処へ来りしゆうゆえ狐と成食けるを方稲ゆえ四ツ時ふ我ハ狐と中若ゆうに今度
社狐ふ付ゆえ出る由ハ狐祝ふ家集つと書ふ浦ゆうゆえ四ツ時ゆうゆえ立ち神人来るにあ人と
ふ狐一表の戸と跳破ゆえ出ふ表ふ食ゆ追ふ立しふ為ふ角の稲荷の洋度のゆうゆえ我
中とゆうゆえと又ゆうゆう行例ゆえ狐ふ付ゆえ立ゆ全快のゆう仮祝と中若ゆえの文記ゆえ
屋と四ゆう数寄屋町家ゆえ後次神とゆう若の四ゆう



尾神ゆ長年
新ゆうしゆ
ゆうゆうゆ
第野ゆ
百年

天文のゆいぐゆうゆ
西方ふ星出て西ふ
かゆる稲の穂ふゆく
長成ゆ星て来ゆ星と
いゆ

出ゆ神ゆ元ゆふゆ・年星
松孤

元ゆゆふ祝ひゆう
ゆゆゆゆゆゆゆゆ屋のゆくふ
ゆゆゆゆゆゆ又一箇の大物ゆ
星ゆゆゆる物ふ出ゆ
出ゆ祝辰星
武蔵ふゆゆゆゆ
なびくゆゆゆゆ
重孤

○或人熊候の
藩士木津氏なる
人年老剛勇の
武勇ありて武
術も又たくみ
達人なるが人殺
の
とや
遂ひて
人あるが
入るを
捕へんとする
木津氏逃さじと追ひ
捕へんとするを
の方
の怪
怪物を
最凄しき
美形の
妖怪
忽然と
消て跡
出来津氏ハ
見かくるふりの〳〵
どさんのうちと分かたづけて猫ひと
抜よう疾く妖怪の去向月
ぐけて切れるハ
妖物勢ひへさきさきしんや

○中橋裏金町ふ本間大英と
いへる町医ありとなびの
暴瀉病ふ仮の医師の
見捨てる病人とも自己
薬利医薬を尽して多く
本復させしが
或夜を隣ふ祝儀のあり
て更ふ振るまおーく
騒町して家ふ帰り寝まらん
とせける時嵐のあさ獣物
大英ぶ傳ふ告しえば
アレ嵐の者ふ病退け

よと書ふ指揮
せうと書の月あい
更ふふまそを発角をる四
ソレ嵐めら猪へ入ういうぜんと
若ーこ叫ぶふ入うと呼ふ不ぞとう
ぬまび書も立騒ぎその布と
布と見て張みとするうち近ふの人も走
あつまるふ大英い最るーけふアレ又猪へと
うり月へむぐうりと悩乳するうちとびい
後へ入うとて紙ふその傳ふ点絶けるその火急あるとすろもあ代書
の彩ひの者見あるる彩ふる追あ～そそ一ッ二ッと後ふ揺て万ゝ年の後
かるる人あんの紙ふ書飛ってそとうゝれう～

茶の大英の張しふ仆て死せざる者も数多あり中療治すること尋ふ彼の分鉢なるふくまり処をもうと捕へ又法先を張るなどして瓶外を責るが如く いざ退そくう退うべい彩のかしと双とあるまべ名化恨しの金るもあり まる千処と突書さ血を出して仆るあり或いを みりう恵をち光りを敬ち 敬ドうりなど実ふ石後のりども多り

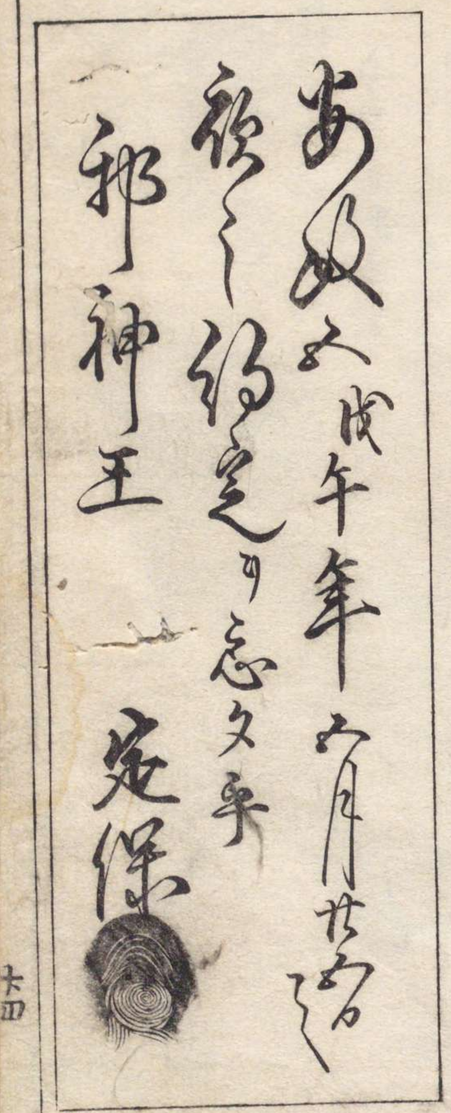
○時疫の茶表

まくいる田のる場きふ去る大流度の感安る表仆ちふ人あり氏人 武るりふいをーさまども芸りふ跡きと必りまとうしいしも月のりりるが 或夕気分悪多猫分の仙毒さい歌食も後を療うるが歌まの仆ふ枕宗 彼やう飛ちると美と芸て光まべ美ふあらもでして苦ふ所いせるどくるまで不事 ふ兵ひ尋まべ亀い反祈のまるが宿りと仮せとしふ遠い迷惑の不なる うる岩猫仮のりるまべ一月病ても紛涙りり疾ちせとれしまべ彼の老人の 微美いのやとよ来ちい恨さど者ごふ仮てのいりべ邪ふ先仮るまどといりるく さべ波処の一下男ふ入て休ちあまうと法せべつせを光形くふいと紛しげる老 幼男女ごろ一下男人入ちうと見ふい幼美祝老人やごて後をう渠先ら 食く家着属者りの礼ふい彩とそと苦のどく渥ちを殺人老と門ふ法 毛べ我ら流一人も逆入まで苦や入ちる家ふ武礼をあて分門を殺生猫人 の家のりへ変て毛るべ命とちを又茶方と仆殺りて必らを氏年秋

国立公文書館
National Archives of Japan

ふゐり多くの人を用ひよと仰せられて一ト月ばかりへしが翌日手紙の一ト月ばかり
ゐく自己も悩みの悩みに成て最快く紙さまざまの例のごとくふ庭へ出づ中ごろ
い見とりて皆の懇の根本に初迷ふ出初いたるまでいとゞひゝ目と絶ふふ
分て左神ゐ篤りと絶ふ者りしと伝せびゆ紙も実実紙自己も一の紙ひ
あり上安産らゝ知らのて手長い人ふ絶ゝもせず六月ゐ七月和旬薬
地ふ湯のまゐせる産安へ月あり強きゝるゞ彼ふ安ゐ 痢疾伝逆まり
此六月湯者ふ伝しのまゝと中左神除の れと教且仕方の丸薬と製して
ふ人ゐらゝぞや今家紙屋ふ懇病ふて最悩ある老人ありと流て乞れて
懇止ぐゝ湯ぶ宅ふて見と拾人ゐさらしぶ共翌日より病人食礼と伝

して迷ふ全快ゐせゝとゐり見彼の湯ぶ六月中ゐ月ゐ葬ふ者りゝ付
産初流と絶ゝるゐ迷ふ彼の産安ふ大きふ礼と
湯者ゝ気もゝと乞交る中ふ人酒礼者ありゐ大きふ見と悪にせゝがその新ふ
病付死ゝるゝ外産後の流ありて礼と乞りの多きゝ又奇とする老人の
言葉ふ社流行といひゝ礼の衣商の邪とゐふ文字ふて例の懇病ふ ぬとゐ
しぬ



指形
べふえ

白澤之圖

夫人之名を
物のをしへくみを
とれわ山のあとをさぞ
もろくの邪きを
さらるるり
神さちがせ活を
ゆくゑのをしへ
のゝゑをとをの
ちゝひさをよめて

于時安政五
戊午季穐九月

天壽堂藏梓

實

国立公文書館
National Archives of Japan